

塵——同一平面上の

中尾拓哉

動物たちは匂いを嗅ぎ分ける。人間の張る罨に捕らわれないように。展開されてきた戦略はすでに熟知され、大抵の場合は嗅ぎ分けられてしまうだろう。神経を研ぎ澄まさなければならないのだ。

水口鉄人は、これまで美術史において展開されてきた絵画的問題を嗅ぎ分け、日常にある見慣れた様態に触れ、擬態化する表現をおこなっている。たとえば、何も描かれていないキャンバスにセロハンテープを貼る、というように。なんだ、セロハンテープか、とそれ以上は誰も気に留めないかもしれない。しかし、日常の状態を断片化するセロハンテープは、我々の目を欺いている。いや、誘っているのだ。そのセロハンテープがアクリル絵具でできていると知れば、透過体のレディメイドに擬態化した断片こそが、絵画であり、メディウムであり、造形であり、それらを一手に引き受ける何かであり、になりえるのだ、と。空間の中に入ってほしい。そして、目を凝らしてほしい。床に散りばめられた塵は、絵に、あるいはそれになろうとしてやめた、といったあり方で、定着している。図であった塵が掃かれれば、地であった床が現れてくる。それだけのこと。しかし、それでも形は現れては消え、掃くたびに地と図は簡単に反転を繰り返し続ける。

洞窟の岩肌にバイソンを浮かび上がらせたホモ・サピエンス、壁の染みに風景を見たレオナルド・ダ・ヴィンチ、床のキャンバスに絵具を撒き散らしたジャクソン・ポロック、それとも——。概念的に成立している部分と、実質的に成立している部分が簡単に反転してしまう場所。そこに留まり、掃いていくこと——日常の道具で、日常の動作で。我々は一体何を見ているのだろうか。確かにすべては見慣れたものへと変わってしまう。

——その後で。匂いを消す、肌を通す。罨を張るために。塵——同一平面上の顔料と出会う ^{あわい}間に、繊細に、粗雑に。